

# 大学生の衣服のリユース行動促進に関する研究

環境デザイン学科 山川研究室 田中秀幸

## 1. 背景と目的

近年、日本では循環型社会の形成が大きな課題とされている。さまざまな品目に対して3Rの施策が進められているが、あまり進んでいないもののひとつに衣類があり[1]、3Rの中でも衣服の新規製造の環境負荷を抑えるリユースを進めていくことが重要であると考えられる。

しかしリユースといってもその方法は様々である。友人等に衣服を譲る行為もリユースである。しかしながらもらう側にはいらぬ物もあるため、結果として譲る行為自体が死蔵(使われずに眠る衣服)の原因にもなりえる。大学生を対象とした林[2]の調査によれば不要な衣服を主に死蔵する学生は3割にのぼる。死蔵によりリユースされないと、その分、衣類の新規製造が増えて環境負荷が増加するため、死蔵を減らし、リユースをすすめることが重要である。しかし死蔵の実態・要因はほとんど明らかになっていない。

またリユースの方法には売却もある。売却は必要な人が購入するため死蔵されにくく、売却する人も収入が得られるため死蔵せずリユースする動機付けになり得る。林[2]は7.5%の学生が不要衣服を主に売却していると報告、また岸川ら[3]は女子大学生を対象とした調査において35%に売却経験があると報告している。しかし売却要因は報告されていない。

そのため本研究では大学生の衣類の売却や死蔵の実態及び要因を明らかにするとともに古着のリユースを推進する方法を提案することを目的とする。なお対象を大学生に限定している理由は、属性を限定することで要因分析を行いやすくするためである。またスペースの関係上、死蔵に関する研究内容は割愛する。

## 2. 研究方法

本研究ではインタビュー調査に基づき古着の売却要因及び死蔵要因に関する仮説を立て、これを質問紙調査のデータで検証する。あわせて売却行動及びリユース・リサイクル行動の促進可能性を検討する。

インタビュー調査は2014年4月～5月に京都府立大学の学生(男性5名、女性4名)に対して実施、主に衣服の売却・死蔵の実態、古着への意識の詳細を尋ねた。

質問紙調査の概要を表1に示す。調査対象は主に本学の環境デザイン学科及び生活環境科目群の大学院生である。ただし初めに2, 3回生に実施した質問紙に不備があったため当該データは分析から除外した。なお売却割合、リユース・リサイクル割合、ごみ処分割合は、4回生以上についてはそれぞれ「1. すべて(10割)」、「2. ほ

ぼすべて(8割以上10割未満)」...「7. 全くない(0割)」の7段階の順序尺度で尋ね、それ以外の学生には数値で割合を記入してもらって上記の7段階尺度に当てはめた。

表1 質問紙調査の調査方法

|             | 第1回調査                                  | 第2回調査                                       | 第3回調査                      | 第4回調査                      |
|-------------|--|---|----------------------------|----------------------------|
| 実施年月(2014年) | 11/28～12/5                             | 12/8～12/15                                  | 12月22日                     | 12月24日                     |
| 対象者         | 4回生以上                                  | 1回生   | 他学科                        | 3回生、他学科                    |
| 配布数         | 63名                                    | 39名   | 8名                         | 15名                        |
| 回収数         | 24名                                    | 21名   | 8名                         | 15名                        |
| 配布・回収方法     | 11/28に配布し、期限を12/5とした上で回収ボックスを設置して回収した。 | 12/8の授業内で配布し、一度持ち帰ってもらった後、再度12/15の授業内で回収した。 | 12/22の授業内において配布し、その場で回収した。 | 12/24の授業内において配布し、その場で回収した。 |

## 3. インタビュー調査の結果と仮説の構築

インタビュー調査から衣服の売却要因として3つの要因を抽出した。1つ目は古着購入の有無である。古着を売却していた学生は2名いたが、いずれも古着屋で衣服を購入し古着屋で売却していたこと、売却しない理由として手間を挙げる者が複数あったが、古着購入者であれば手間が減ると考えられること、などによる。2つ目はブランド志向の強さである。古着を売却している学生にブランド志向が見られたこと、金銭的動機も見られたがブランド物以外では非常に低額の買い取りか買い取り不可になること、などによる。3つ目は性別で、女性に、着ていた衣服を他人に着られるのが嫌と言う意見があり、過去の調査でも類似の指摘があったため抽出した。

## 4. 衣服の売却の実態と要因

質問紙調査で衣服を処分する際の各割合が2割以上のものをそれぞれ売却有、リユース・リサイクル有、ごみとして出している、として集計した結果を表2に示す。

表2 不要になった衣服の処分方法

|            | 売却有 | リユース・リサイクル有 | ごみとして出している |
|------------|-----|-------------|------------|
| 全体(有効数60名) | 22% | 40%         | 87%        |

学科及び学年による売却有の割合に差が見られなかったため、まとめて示している。今回の調査では衣服を処分する際に2割以上売却する人は約5人に1人という結果となった。

次に売却要因に関する仮説を、7段階の順序尺度を使用したウィルコクソンの順位和検定で分析した(表3)。質問紙調査をもとに、古着購入の有無については現在も

古着購入している人を有とした。また、ブランド志向についてはブランド物購入の有無を尋ね、購入有の人に対して、購入しているブランド名及び購入店舗を尋ねた。その際、人によりブランドの定義が曖昧であるため、それがブランドかどうかについては金額により決定した。例えばTシャツ1枚では最低5000円以上のものを今回ブランド物であるとした。

表3 衣服の売却要因に関する検定結果

|        | WilcoxonのW | 漸近有意確率 | N  |
|--------|------------|--------|----|
| 古着購入   | 754.5      | 0.024  | 60 |
| ブランド志向 | 1147.5     | 0      | 60 |
| 性別     | 873.5      | 0.47   | 60 |

表3から、古着購入の有無は危険率5%未満で有意、ブランド志向は危険率1%未満で有意となった。しかし、性別については有意な関係は見られなかった。その理由としては、仮説を立てる際に参考にした「自分の衣服を知らない人に着られるのに抵抗がある」という意識が、後述するように今回の調査対象者にほとんどみられなかったためだと考えられる。

さらに衣服を売却しない理由についても尋ねた（複数回答可）。結果を表4に示す。

表4 衣服を売却しない理由

| マルチ回答                   | 全体  |
|-------------------------|-----|
| 周りからお金に困っているようにみられるのが嫌  | 0%  |
| 自分の衣服を知らない人が着るのが嫌       | 2%  |
| 持っていく手間の割に得られる金額が少ないから  | 29% |
| 売するための準備をして持っていくのが面倒だから | 40% |
| いつか使う時が来るかもしれないから       | 19% |
| 売る手続きが面倒そうだから           | 40% |
| 知人への譲渡や家族間で着まわしているから    | 33% |
| いらぬ衣服が着られる状態ではないから      | 46% |
| 人数                      | 52  |

表4に示すように「いらぬ衣服が着られる状態のものではないから」、「売る手続きが面倒そうだから」、「売するための準備をして持っていくのが面倒だから」を挙げる人がそれぞれ40%強と多い結果となった。また「持っていく手間の割に得られる金額が少ない」と金銭面に不満を抱えている人も30%程度いた。以上より、売却に関する手間を減らし、金銭的メリットを高めることにより売却行動が促進していくと考えられる。

## 5. 衣服のリユース・リサイクル促進の可能性

使える衣服を売却せず死蔵している人や衣服をごみとして出している人に、衣服のリユース・リサイクルを促す上で有効な方法を検討する。質問紙調査において自由記述でどのようなサービスがあればより多くの古着をリユースにまわすかを尋ねるとともに衣類回収事例を調べ、6つのしくみに整理してその利用意向を尋ねた(表5)。

「ごみとして出している」は表2と同じく2割以上ごみとして出している人で、「使えるものを死蔵」は売却しない理由として「いらぬ衣服が着られる状態のものでは

ないから」を選ばず、かつ死蔵衣類がある人である。

表5 各種回収の取組みに対する利用意向度

|                     | 使えるものを死蔵 | ごみとして出している | 全体  |
|---------------------|----------|------------|-----|
| 購入店で買った衣服のみ無料引取り    | 59%      | 50%        | 53% |
| どこで買った衣服でも500円券と交換  | 86%      | 83%        | 84% |
| 購入店で買った衣服のみ500円券と交換 | 46%      | 46%        | 50% |
| 回収ボックスの設置           | 36%      | 35%        | 40% |
| どこで買った衣服でも無料引取り     | 23%      | 25%        | 25% |
| 月1度、公共施設での集団回収      | 9%       | 14%        | 15% |
| 人数                  | 22       | 52         | 68  |

「購入店で買った衣服のみ無料引取り」のみ一問一答で尋ね、それ以外については選択肢として列挙し、複数回答可として選択を求めた。そのためここでは「購入店で買った衣服のみ無料引取り」以外について比較する。結果的に、使えるものを死蔵している人、ごみとして出している人と全体とでは利用意向度に大きな違いは見られなかった。「どこで買った衣服でも無料引取り」は25%程度、「購入店の衣服のみ500円券と交換」は50%程度の人が利用したいと答えたのに対し、「どこで買った衣服でも500円券と交換」は80%強の人が利用したいと答えた。このことから、持っていく準備を軽減し500円というお金のインセンティブが働くことにより、リユース・リサイクルは促進されると考えられた。

## 6. 結論

本研究では、主に京都府立大学環境デザイン学科の学生を対象として、衣類の死蔵やリユースの実態及び要因を分析するとともに、古着のリユース推進方法について検討した。その結果、以下のような知見が得られた。

- (1) 今回の調査では、衣類の売却を2割以上行っている学生は22%だった。
- (2) 衣服を売却する割合は、古着購入の有無、ブランド志向の強さに有意な影響を受けていた。
- (3) 普段利用する店にどこで買った衣服でも1袋持っていくと500円の割引券と交換してもらえる案では、衣服をごみに出す人でも83%の人が利用すると回答しており、リユース促進に有効だと考えられた。

今後は、得られた知見の一般性の確認と上記(3)の有効性の実証が課題である。

## 参考文献

- [1] 岩地加世, 「衣との付き合い方—これでいいの?衣類のリサイクル」 廃棄物資源循環学会誌 21(3), pp.132-139, 2010
- [2] 林隆紀, 「衣服に関するリサイクル意識と行動」, 社会学部論集, 第46号, pp.1-16, 2008
- [3] 岸川洋紀, 嶋口菜由加, 「衣料品の再利用に関する消費者意識の調査」, 第22回廃棄物資源循環学会研究発表会講演論文集, pp.35-36, 2011